入選

水のいのちを見守りたい

北海道　函館市立的場中学校
三年　水関　実法子

「雪代（ゆきしろ）が治まったら、川に行こうか？」桜の花が満開となる頃、父のこのひと声からわが家の春は始まります。近くの町の渓流を、防水の胴長ズボンをはいて歩くのです。

父と兄はイワナつり、母と姉は山菜採り。小学生の頃、私は父にせがんで両方させてもらいました。身軽な私は、崖を器用によじ登って、斜面に生えている行者ニンニクをあちこちで摘んで、大きな花束のようにして持ち帰って、沢で待つ母を喜ばせました。また、ひとりではつり上げられないくらいに大きなイワナを針に掛けて、父を驚かせました。

今年もいつもの渓流に出かけて、フキ採りをしました。沢の流れのゆるやかな岸には、大きなフキがたくさん生えています。フキの下には、小さな支流が流れ込んでいます。支流の方に入りこむと、流れの真ん中にもフキがいっぱい生えています。フキの生えている地面の回りから、水がわき出ているのです。フキの真っ青な茎に、ナイフで切れ目を入れて刈り取ると、切り口から水がピュッと噴き出します。「これは水ブキといって、とても美味しいのよ。」と、母に教えてもらいました。

「雪代」という言葉を調べてみました。「雪解け水」の意味でした。そうか、冬の間に積もった雪が、春の暖かさで少しずつ溶け出して沢に入り、その水を吸い上げて大きなフキが育つのです。あの青い茎の中には、雪解け水がたっぷりと蓄えられているので、切り口から水が噴き出すのです。

「北海道の水はおいしい。」栃木県に住む母方の祖父母が、函館に住む私たちを訪ねた時の言葉です。近くの七飯町や八雲町には名水と呼ばれるわき水があり、父が汲んで来た水で入れるお茶やカルピスは、とてもよい味がします。父方の祖母が住む四国では、真夏になると雨があまり降らなくなるため、毎年のように水不足になります。ダムの水が減ったために、底に沈んでいた建物が見え始めたというテレビニュースが流れ、新聞にも、水不足を意味する「渇水」という言葉が出てきます。

きっと暑い地方では雨が少ないのだろうな、と思いながら、降水量のことを調べてみたら、意外なことがわかりました。北海道が年間１１００ミリなのに、関東では１６００ミリで北海道の１．４倍、四国は２２００ミリと北海道の２倍も雨が降っていました。もしかしたら北海道の降水量は雨だけで、雪は省いてあるのかなと思い調べてみたら、雨量計に降った雪も溶かして計量しているとのこと。やっぱり北海道は関東や四国に比べて雨や雪が少ないのです。

水の循環ということを考えてみました。降る雨は、地面にしみこんで地下水になったり、川となって町の中を流れたりして海に入り、蒸発して雲になり、また雨になって地上に戻ってきます。雪の場合はどうでしょうか。降った雪は山に積もり、気温の上昇する春にかけてゆっくりと溶け出します。函館の場合、11月に初雪、1月に根雪になって、3月から雪が溶けはじめ、5月まで山の雪が残ります。そうか、雨なら降って1週間もすれば海に流れこんでしまうのに、雪だと海にたどり着くまでに2ヶ月もかかるのです。降った水を蓄えておいて、時間をかけて少しずつ下流に流すという意味では、積雪は自然のダム、私が採ったフキも緑のダムと言えると思います。

私たちの暮しに、水は欠かせません。自然のダムや緑のダムは、私たちの暮しを支える、目立たないけれど、とても重要な仕組みです。

おいしい水は、私たちの体を作ってくれます。そして、水を大切に使う暮しは、私たちの心を育ててくれます。水の恵み豊かな北海道に住んでいる私たちは、このことを忘れず、おいしい水を大切に飲んで、体と心を育てていきたいと思います。

入選

「人の命＝水」の求められてる方程式

青森県　弘前学院聖愛中学校
二年　盛　嵩

僕の住む津軽地方は、自然に恵まれていて岩木山のふもとには、世界遺産の「白神山地」が広がっている。昨年、学校のサイエンススクールで、その白神山地を訪れた。また山頂に白い雪の残る白神は、一歩足を踏み入れると空気も緑も濃くて、別世界のようだった。高く天に向かって何本も何本も伸びる太くて大きいブナ林は圧巻だった。

しかしそのブナは、巨木である事以上に、ものすごく大切な役割をしているそうだ。巨大なブナの天然林へ降る雨や雪は、たくさんの木の枝葉や幹を伝わって大地に吸収されて多くの動植物を育てながら、水は谷川や泉に湧き出て、やがて大海に達し、豊かな恵みを与えてくれる。その海水は水蒸気や雲に姿を変え、再び白神山地や僕らの住む町にやってくる。このような生命の育みを左右する水の循環が自然の中で営まれている不思議さ、そしてその恵まれた環境に住んでる幸せに僕は、感謝せずにはいられなかった。

考えてみれば、普段当たり前のように使っている水は、自然の恵みをいただいて家庭の蛇口から出ている。それなのに、当然ある物として何も考えていなかった。水は人間が生きていくために、何よりも不可欠な物だ。なのに、地球上の全ての人間が何らかの形で水を確保出来ているわけではないことを忘れていた。絶対に必要で、これまで地球上にずっと存在し続けた水は奇跡である。決して、いつでもどこでも手に入る物ではないのだ。

以前テレビでエリトリア地方の子供が、水を求め何十キロも頭に水おけを載せて歩く姿を目にした事がある。彼らは近くの水源まで夜中に水汲みに出掛けるという。日中は激しい砂嵐が吹くので夜しか外出出来ないからだ。子供達は朝方やっと水汲みから帰宅するのだが、疲れ果て学校へ満足に通う事すら出来ない。村の長老が「この村に未来はない。」と言っていた言葉が僕の胸をしめつけた。

また、水があっても、消毒されていない水のせいで、コレラや赤痢などの今の日本では考えられない病気にかかったりもするという。

日本は、このような国に比べると本当に恵まれている。僕達は存分に水を飲み、水を浴びる。炊事、掃除、洗濯、そしてトイレを流すのも水が必要だ。庭の花々にも水をまく。水の消費者は一人一日百リットルを優に超えるそうだ。更に電化製品、紙、プラスチック等、工場で作られる物全て、製造過程で水が使われている。このような製品を含めれば、水の個人使用量はもっと多くなる。また、食料を栽培するにも莫大な水が必要な事を考えると、僕達は水を食べているようなものだ。

確かに祖父の家で田植えの手伝いをした時に、田にゴオゴオと流す水の圧倒的な量に驚いた。田に、あのような莫大な水を使って米を作り、僕らはその米を食べて生きている。水に命を支えられている。

人々は水辺で憩い、川で釣りをする。また、神様に参拝する前に、水で手や口を清める。水は人々の心のやすらぎにもなる。それにもかかわらず、僕達は、水は必ず何とかなるものであるかのように思い込んでいる。

本当は、僕達はもっと水を大切にしなければいけない。今日、地下水位の低下、汚染、湖や川の枯水消失など世界的な水危機が迫っている。何といっても、生活スタイルの変化と発展に比例する、水の需要の急速な増加は今後更に深刻になってくる可能性もある。

僕らは出来る事は実行しなくてはならない。皆が実行出来る蛇口の栓をひねる節水から始めようと思う。そしてその事を周りの人に伝えよう。また身近な自然に感謝し、守る努力もしなければならない。汚染にも気づこう。その汚染を減らすために、僕らが出来る事を考え、声に出していこうと思った。全ての人間の命を支えてくれている大切な水のために。

入選

水土の礎、秋田の場合

秋田県　横手市立増田中学校
一年　後藤　ゆうひ

『水土の礎』という、農業農村整備情報総合センターのインターネットサイトがある。水土の歴史年表を見たら、七三三年（天平五年）秋田柵を設置、天平十五年、平鹿堰、成瀬頭首工、雄物川水系の開発…と、奈良時代のうちに、平野を潤す水路が整備され、水田が広がっていたことがわかる。

七九四年の平安京遷都、坂上田村麻呂が蝦夷討伐した頃より以前のこと。私にしてみれば原始時代と区別がつかない古い時代。そんな頃に、秋田県では水土の礎を築いていたことになる。

すごい。私は嬉しくなった。なぜなら秋田は遅れている田舎というイメージだったから。こんなに古くから整備されて来たのだから、もう水資源開発なんていらないのでは。そう思っていた時、地区の集まりから帰って来た両親がぼやいていた。とうとう町水道が来ることになり、全員強制加入になれば、暮らして行けなくなるかもしれないと。

どうして町水道が来れば困るのか…私には理解できなかった。上水道と下水道があれば便利だし都会に近づいた感じがする。今まで台所の洗剤もお風呂のシャンプーも川に流していた。農村地帯なのだから、田畑の作物や魚にも影響を与えていたと思う。井戸水が涸れたりにごったりして困っている家もいっぱいあったから、町水道はありがたいはずなのに。

私は理由を聞いた。「第一はお金の問題。上水道は全員参加が原則だから、今、使っている井戸を埋めないといけない。そうしないと下水道の使用量がわからなくなるから。なにしろ下水を処理するためには、上水を処理する何倍ものお金と手間がかかる。もし、災害が起きて上水道が使えなくなったら、埋めた井戸を元に戻すのに大変な労力が必要になる。うちは銭湯だから、お客さんが使う水の量は半端じゃない。今は水道料金がかからないからいいけど、毎月使用料を払うようになればお客さんが来なくなる。」

私は思った。我が家だけ我慢すれば、他の大勢の人が助かるからいいんじゃないかと。

「大がかりな設備を作ると、維持費がかかる。あちこちで老朽化が原因の事故や水質悪化が騒がれてる。これからは科学や技術を個別で活かせるような事業に切り替えるべき。」

そうか。一言で水資源開発を語ってはいけない。必要かどうかを一つとっても色々な意見に分かれる。何千年も昔から始まった水資源開発。まだまだこれで完了というわけにはいかないようだ。

歴史年表に「完了」の二文字が刻まれる日が待ち遠しい。

入選

「水」を考える

山形県　河北町立河北中学校
三年　秋場　彩夏

私には忘れられない一枚の写真がある。それは幼少の頃に見た宇宙空間に浮かぶ地球の写真だ。青く輝く地球の姿は本当に神秘的で何度見ても飽きることはなかった。

ある時偶然目にしたテレビで、カンボジアの子供たちの姿を見た。家族の為に大変な苦労をして泥混じりのひどく濁った水をくみに行く。菌や害虫の入ったその水を飲んだために伝染病に罹る子供たち。もし私がその場所にいても絶対にこの水は飲めない。でも彼らはその水を飲んでいるのだ。何故なら他に水はないから。人間の体は七十パーセントが水分である。そのため、一週間水分を取らなければ死んでしまう。生きていくために水は必須なのだ。そう思うと今の自分の豊かな環境に感謝せずにはいられなくなった。

蛇口をひねれば水はすぐに出るものだと思っていた私にとってこの映像はとても衝撃的だった。だが、考えてみれば私が当たり前に飲んでいる水はどこからきているのだろう、という疑問がわき調べてみることにした。

日本は普及率九十九パーセントと先進国随一の水道普及国である。小さな島国ながら六月の梅雨、秋の台風、冬の降雪など四季折々の雨に恵まれ、森林も多い。雨は山に蓄えられゆっくりと川になる。日本の水道の取水源は河川水四十三パーセント、ダムが二十四パーセント、残りが井戸や伏流水だという。

私の住む河北町は、村山広域水道から水道用水が供給されている。この水源が「寒河江ダム」である。小さい頃よく家族でドライブに出かけた寒河江ダム。私にとっては百十二メートルの噴水とソフトクリームが楽しみだったが、このダムこそが私達の生活の「水」を支えている事を知った。ダムには水道用水の供給だけではなくたくさんの目的がある。洪水調整、河川環境の保全、かんがい用水、発電。ダムのおかげで安定的な水量を確保することができる。ダムは私達の安心安全な生活にはかかせないものなのだ。

ダムから流された水は取水せきから取り入れられ浄水場に送られる。そしてろ過や沈殿凝集、消毒、様々な検査を経て安心安全な水が私達に届くのだ。感染症などの心配もしないでごくごく水を飲めるということが世界からみてもどれだけ幸せなことか改めて感じた。

今回水について色々調べて一番驚いたのは地球の水は太古の時代からほとんど変わることなくただ循環を繰り返しているという事だ。地球に降り注ぐ雨の量は毎年一定量であり、地球から蒸発した水蒸気はある日雨になって地球に降り注ぎ再び還ってくるのだ。

つまり、今私の周りにある水は二十億年前に作られたものであり、幾度となく世界を旅し循環を繰り返して私と出会ったのだ。なんと神秘的なことだろう。ならば私から旅立つ水はできるだけきれいにして旅立たせてあげたい。その為に私にできることはなんだろうか。

豊かな日本で本当の意味での水の大切さを知っている人は少ない。だから平気で川や海を汚し、ゴミを捨てる。「節水」という言葉は知っていても水に不自由したことがない私にはどこか他人事のように聞こえていた。でもそれではいけないのだ。水は限りある資源だ。便利さ、豊かさを優先せず節水を心がける。生活排水を汚さない。そんな小さな心がけで多くの緑が育つ。命が育まれ川に魚が戻ってくる。そうやって自然界は守られていくのではないだろうか。

私から旅立つこの水は今度はどんな出会いをするのだろう。私達は水がなければ生きていくことはできない。だからこそ限りある資源を大切にして未来へ受け継いでいこう。いつまでも青く輝く地球を守るために。

入選

ふる里の水と共に

福島県　郡山市立郡山第七中学校
三年　荒井　真愛

「あっ水。水が出たよ！」

日本の観測史上最大のマグニチュード9を記録した東日本大震災。すぐにライフラインは寸断され、私も水を求めて何度も給水所に向かった。寒さと余震でふるえる不安な気持ちを抑え、一滴の水もこぼれ落ちないように慎重に水を運ぶ。蛇口をひねればいつでも安全な水が大量に出る快適な生活を、あたり前に思っていた。ポリタンクの中の限られた水は、私にはずっしり重く、今までどれだけ水を無駄にしていたかを改めて思い知ることになり、水の価値を心からひしひしと感じながら家路を急いだ。約一週間続いた断水後に初めて家の蛇口から水が出た時は本当に嬉しくて、透明な水がとてもキラキラと光り輝いて見え思わず大きな声で叫んだ。

福島県は一級河川の阿武隈川をはじめとする大小約五百の河川に恵まれ、その水源のほとんどが県内にあるため源流県ともいわれ、他県にも誇れる恵まれた水環境だ。清らかな水によって多くの緑の樹木や草花が成長し、四季折々鮮やかに色付き芽吹く。鳥のさえずる森林は、緑のダムとして土砂崩れや洪水を防ぎ雨水を蓄え浄化し、川の水として送りながら川や海の生物の命を育んでいる。私達が身近な水を守ることで結果的には循環し続ける水を守り、自然界の生態系も守られる。古来から私達人間そして地球上の全ての生命体は、水によって育まれ、生かされていることを忘れてはいけない。

様々な恩恵をもたらす水が、大地震をきっかけに突然津波に姿を変えて私達に襲いかかった。千年に一度ともいわれ想像を絶する巨大津波の襲来は、一瞬にして人々や家屋、車、広い田畑を次々に飲み込んだ。水の脅威によって多くの尊い生命や財産を奪われ、陸と海の境目が分からない位の壊滅的な被害を受けたことで、水の起こす自然災害の恐ろしさを初めて目の当たりにした。

私は、今回の震災で、水の持つ素晴らしく偉大な力と、恐ろしい破壊力の全く異なる側面を同時に知った。津波が去り、がれきの山で覆われ被災地となった私の街福島の姿を前にして「何が出来るか」と自分自身に問いかけた。この瞬間を生きていることに感謝し、先人が残してくれたふる里の水を継承意識を持って後世へ伝えること、それが十四歳の私に出来る使命ではないかと考える。次々と襲いかかる悲しい現実に、苦しみ戸惑い心が折れそうになるが、今だからこそ前を向いて水と向き合わなければならない。母親の体内で羊水という魔法の水に守られ、この世に生命を受け、すぐに産湯に浸った時から、日々私達は水と共に生きてきた。今、傷付いている心を癒すためにも、改めて水の秘める力が重要な役割を持つのではないだろうか。水が風呂となり冷えきった身体を温め、美味しい食べ物に姿を変え、私達のお腹だけでなく心も満たす。時には彩る花となり和ませる。川のせせらぎや穏やかな波の音、五感すべてで感じて安らぐことが出来る素晴らしい水。

水の持つ力を最大限に引き出すのも、水に畏怖の念を抱くのも、私達の水に対する考え方で大きく変わる。水に守られ水を守る。お互いに支え合って共存していることを忘れてはいけない。水の多面性を深く理解し、水の大切さを私達一人一人が認識すれば、水を取り巻く地域の環境も変化し、おのずと水災害の問題は縮小し防ぐことが出来るかもしれない。

断水生活を経験し、蛇口から水が出た時のありがたさは、今後も忘れることはないでしょう。

水は限りある貴重な資源。私一人の力は微力だが水の大切さを呼びかけることで、いつか大きな力となり、豊かなふる里の水を未来へ受け継ぐことが出来るはずだ。

入選

水とともに

茨城県　茨城県立並木中等教育学校
三年　設樂　美沙季

「ズボッ。」嫌な音がした。長靴に水が入り込んできた。どんな状況だかは想像できたけれど、やはりそうだった。目線を落とすと片足が泥の中にすっぽりはまっていた。北海道東部にあるキリタップ湿原を訪れたときのことだった。

キリタップ湿原は日本で三番目に大きな湿地帯で、タンチョウなどの鳥類をはじめ希少な動植物が生息している。湿地を守るための国際条約「ラムサール条約」の登録地にも指定されていて、豊な自然と人が共存しているところだ。

私は湿原探検をしていた。ぐちゃぐちゃしていて人が歩くことは容易ではなかった。木の棒を刺すとなんと二メートルの深さまで刺さった。ガイドさんの話によると、昔川だった所に生えた草が幾重にも重なってたまっているのだとのことだった。つまり、私の足下には私が生まれるずっと前の自然の姿があるんだ。草の層はここの歴史なのだと思った。

ガイドさんの話でとても考えさせられた話があった。「この泥はね、長い年月をかけて自然が作り出したミネラルがいっぱい入った栄養庫なんだよ。山の清水が川となり、このミネラルを海に運ぶんだ。だからここの海の幸はすごくおいしいんだよ。」話を聞いた当初はへぇとただ聞いていただけだったが、今思うとそれはとてもすごいことだと思う。豊かな自然が豊かな水からできている。雨が土に染みこみ、長い年月をかけて山のわき水となり、川になって海に出る。この水の大冒険の繰り返しがたくさんのものの命を支えている。

実際に地元の海で獲れた鮭を食べた。すごく美味しかった。「いただきます。」「ごちそうさまでした。」この言葉は、いただいた命に感謝すると共に、その命を育てた海、自然、水にも感謝する言葉なのだと思った。

水に感謝するなんて、今まで考えたこともなかったから、水に感謝するとはどんなことか、具体的に私に何ができるのかを考えてみた。

水、それは生命の源。その水が、蛇口をひねれば溢れんばかりにでてくる。水を手ですくってみた。この水はどんな冒険を経て今ここにいるのだろう。そう考えてみると、感謝するということは、水を大切にすることだと分かった。

でも、私のような中学生が何か大きなことをしようと思っても、それは難しい。だから小さなことからやっていきたい。歯を磨くとき、水を出しっぱなしにしない。雨水を溜めておいて庭の水やりに使う。

キリタップ湿原は遠いけれと、私は身近な霞ヶ浦や近所の川なども大切にしていきたい。前に浄水場に行ったとき、汚れた水をきれいにするのはとても大変だと知った。だからお皿についた油は洗う前にふきとるようにしたい。また、ポイ捨てをしない。自然を大切にする。直接的に関係なくても自然を守ることが水を守ることにつながると思う。

考えてみたら、小さなことでも私にできることがたくさんあった。これから、家族に節水しようと声をかけてみようと思う。一人から二人、二人から三人へ。この輪がどんどん広がっていけば、きっと大きな力になると思う。

キリタップ湿原はラムサール条約によって自然がそのままの姿で残されていく。でも私は条約がなくても、小さな山々や身近な自然を人々が守っていく、そんな人と自然の関係が私たちのあるべき姿なのだと思う。

水は生きていくうえでなくてはならないものだから、水への感謝を忘れずにこれからも水とともに生きていきたい。

入選

水を考える

栃木県　大田原市立野崎中学校
一年　沼野井　志穂

キラキラキラ。
太陽の光を浴びて、水面の水が輝く田んぼ。まぶしい。そして、きれいだ。
今は、ちょうど田植えの季節。
一年前を思い出す。
私は毎日、この田んぼの前の通学路を登校班の先頭に立って歩いていた。
「オタマジャクシがいるよ。」
「こっちにもいるよ。」
「どこ、どこ？」
無邪気な下級生達の元気な声。後をふり返れば、寝そべって身を乗り出している下級生達がいる。見つけると、つかまえようと手をのばす。届かないのに頑張っているその一生懸命さに思わず笑ってしまう。傘を持っている日には、カエルの背中やオタマジャクシをつつこうとしては、逃げられてしまっている。そして、今にも田んぼに落ちそうになる。見ている私もひや汗ものだ。
私の住む大田原市は、田園風景が広がり、多くの水田がある。私は、小学五年生の時、総合の授業で米作りを体験した。田んぼには、オタマジャクシがいる。カエルが、アメンボがいる。ゲンゴロウもヘビもいる。そして、ホタルイというホタルの住むようなきれいな水があるところに生息するホタルイの種が生えている。このきれいな水は、動物を呼び、植物も呼び、また人間をも呼ぶ。私は、田植えをして、水の力を感じた。
このきれいな水の元は、那須疏水である。一八八五年に作られた那須疏水は、供給対象面積が約四三〇〇ヘクタールと、とても広く、日本三大疏水の一つと数えられている。
そのような那須疏水の作られた場所、那須野ヶ原は江戸時代までは、広大な荒地に過ぎなかったし、那須野ヶ原中央部は、扇状地特有の礫層が厚く堆積し、地下水は深く流れ、大雨の時以外は全く水がなかったそうだ。山崎北華は、「続・奥の細道」でこのように記していたそうだ。「那須野は聞きしに違わず、（中略）草も長からず、木というものは木瓜さへもなし、炎暑の折等何処にぞや、手に掬う水もなし…」と。
明治時代になり、水路開削工事が開始され、那須疏水が完成した。
この那須疏水により、今は、有数のお米の生産地となっている。
私はこの那須疏水を守るために何をすべきだろうか。何ができるのだろうか。
私は最近、那須疏水の前を車で通った。とてもきれいな水が、どこまでも流れていた。しかし、それとは別に、私はポイ捨てをよく見かける。タバコのすいがらや、空缶、ペットボトルのキャップなどが捨ててある。時には食べかけのおかしや飲みかけの飲料水がちらばっている時がある。それを見ると胸が痛む。その一方で、地域ではごみ拾いを行っている。「ポイ捨て禁止」も呼びかけている。そうして、那須疏水のきれいな水は守られている。
今の私にできることは、ごみを捨てないことはもちろん、地域でのごみ拾い活動に参加したり、このように作文を書いたりして、意識を高めることだろう。それらを行うことにより何かが変わるのではないだろうか。一人の力では小さくても、多くの人で協力し合えば、大きな力になる。私は、水がきれいであり続けるために、水を大切にすることの輪を広げたいと思う。それはまた、安心・安全な食につながるのだから。
「おはよう。」
友達の声で、「はっ。」と、我に返る。
キラキラキラ。
輝く田んぼは、私を「行ってらっしゃい。」と見送ってくれるようだ。

入選

水と生きる

千葉県　大多喜町立西中学校
三年　森　千尋

私たち人間をはじめとするあらゆる生き物にとって欠くことのできない大切なもの、水。その水の恐ろしいまでの威力と存在感について、こんなに考えさせられたことはない。豊かな自然と水に恵まれ、当たり前のようにその恩恵を受けてきた私たちの国、日本は、これからどうなってしまうのだろう。あの東日本震災が起こって以来、私の頭の中はそのことでいっぱいだった。

三月十一日、午前中にあった卒業式の片付けを終え、いよいよこれから私たちが学校のリーダーとして活動していくのだという気持ちで部活動を始めた。その時、あの揺れは襲ってきた。その揺れの恐ろしさより、その後目にしたテレビの映像の方が私の心に恐怖を覚えさせた。津波の「水」によって次々にのみ込まれていく道路や田畑、破壊されていく橋や建物、そして、まるで木の葉のように流されていく家や人々……現実に起こっていることとは思えない光景は、私の脳裏から消えることはないだろう。圧倒的な水の威力に対して、私たち人間はあまりにも無力だった。人間がその流れをコントロールできると考え、築きあげた防波堤や防潮堤はいとも簡単に破壊されてしまったのだ。「想定外」という言葉では片付かない、自然の脅威を見せつけられた私たちは、黙って現実を受け入れるしかないのだろうか。

数日後、テレビを見ていた私は自分の耳を疑った。津波の「水」による被災者たちが、いちばん困っていることを訪ねられたとき、マイクを向けられた多くの人たちが、「食料と水」と答えているではないか。水の力によって痛めつけられた人々が、今、いちばん必要としているものが水だというのだ。何という皮肉なのだろう。

その後、さらに信じられない事実が続いた。それは福島第一原発の事故による放射能汚染の問題である。想定外の津波の水をかぶったために起こった事故だと聞いたが、その影響は大きかった。ニュースを耳にした多くの人が水の買いだめに走り、一夜にして水不足となった日本。「被災地へ水をまわそう」という声もかき消されるほど、みんなが安全な水を求め、途方にくれる姿をどう考えたらよいのだろう。生きるために必死な姿を、誰も責めたり、笑ったりすることはできないと思う。

その後、私の暮らす大多喜町でこんな防災無線が流れた。「大多喜町は計画停電によって断水となります。」さらに数日して、「大多喜町の一部の水道水は利根川水域の水を利用しているため飲料水として使えなくなる可能性があります。」という放送だ。その時、母から聞いて、私は初めて知ったのだ。そんなに遠くの川から引いた水が自分の町で使われているのだと。また、父からはこんな話も聞いた。それは、昭和四十五年七月の大多喜町を襲った大水害のことだ。一時間に二百ミリを観測する大雨が降った私の町は、川が氾濫し、道路が壊れたり田畑が水没したりして大きな被害が出たそうだ。日本中からの支援に助けられたけど、それでも復旧までに何年もかかったそうだ。

東日本大震災をきっかけに、私は、大切な水についてまだまだ知らないことがたくさんあるということを痛感した。私たち人間は豊かな自然と水によって今までを過ごしてきた。そしてこれからもそれが続くと思っていた。でも、今回のことで私は気付いた。いつまでも当たり前のように恵みを受け続けることはできないと。世界中に目を向ければ、今までの日本のように安心、安全な水がどこでも手に入る国は多くない。これから先、今、多くの被災地の方々が大変な苦労を強いられているその姿が、私たちすべての姿になるかもしれないことを決して忘れてはいけない。水をどう使うかは私たち次第であるが、それは私たちの生き方が問われることであると思う。

入選

人と水

千葉県　千葉国際中学校
三年　南　裕子

今、我が家は節電ブームだ。大震災の電力不足によるものである。食事の時は電気代わりにスタンドを使ったり、使用しない家具のコンセントを抜いたりしている。その為、四月は三月の電気代の二十五パーセント削減に成功した。母はそれがとても嬉しかったらしく、更に厳しい節電体制が成されている。

私は毎月、祖母の家へ掃除の手伝いをしに行っている。先月（四月）には二日に行ったのだが、その時ある事に気付いた。祖母はお風呂の残り湯を洗濯に再利用するのである。しかし残り湯をくみ上げる機械が壊れてしまっていた為、私は新しいくみ上げ機の取り付けを頼まれていた。私は取り付けをしながらふと思った。「残り湯を使うから水は節約できるけど、くみ上げるのに電気を使う。それだったらあまり意味がないような気がする」つまり片方を優先すると、もう片方がおろそかになってしまうのだ。一応どちらも無駄にせずに水をくみ上げる方法はある。「バケツ」を使うのである。しかしこの方法は後に過度な筋肉痛になってしまう。「少しくらいは水を無駄使いしても、皆も同じだからいいだろう。」そう思ってこれからは水を捨てる事を祖母にすすめた。今はすすぎ一回で洗濯できる時代だから大丈夫だと思った。

しかしこの作文を書く為に世界の水不足について調べてからは、そんな甘い事を言ってはいけないと思うようになった。なぜなら、今世界の六人に一人は水の足りない生活に苦しんでいるからだ。これを自分のクラスに置き換えてみる。すると六班ある班のうち一班は水不足という事になる。もしこの班が国だったら、どれだけの方が苦しむだろう。そう思うとゾッとする。更に私は何年か前に見たドキュメンタリー番組を思い出した。その番組はどこかの国の飲料水について取り上げていた。その国の人々は、バケツを頭にのせて遠くの池まで歩いて水をくむのだそうだ。それを考えると、風呂場と洗濯機の距離など全く苦にならない。更に池の水は泥で濁っているが、その地域では最もきれいな水なのだ。それに比べて私達はどうだろう。蛇口をひねれば必ず透明な水が流れ続ける。それに日本の水道水は、必ず塩素で消毒がしてあるはずだ。この差はひどすぎるのではないだろうか。しかし、私にはそれ以上にショックな事があった。それは日本にも、水不足に悩む地域があったという事だ。日本は「水に恵まれている国」である。だから水に悩む人はこの国にはいないと思ってきた。そうなると今までの水の使い方が情けなくなってくる。

だから水にゆとりがある私達は、ぜい沢に水を使うのではなく、常に節水を心がけるべきである。無理をしてまで節水をする必要はないと思うが、我が家の節電ブームのように楽しんで、ゆとりのあるうちから節水が出来ればいいと思う。ちなみに私の祖母は、私が水を捨てる事をすすめても決して残り湯を捨てなかった。「もったいない。」と言っていた。「おばあちゃんはなんて偉大なんだろう」と今心から思う。私は美しい水だけではなく、祖母の心も受け継いで、また次世代へ託さなければならないと思った。

入選

一杯の笑顔

東京都　渋谷教育学園渋谷中学校
二年　　髙本　祐里

燦燦と照りつける太陽の下、タイの人々は形の違う水鉄砲、中にはひしゃくに水を満杯に入れたかと思えば、道行く人に思い切り水をかけた。

ある日、スーパーの食品売り場で何気なくジュースを買おうとして、隣にずらりと並んでいる２１飲用水ペットボトルに気が付いた。と同時に、私はとても懐かしい記憶を思い出すことになる。

三年前、私はタイの首都バンコクに住んでいた。私にとって初めての海外、タイでの生活は日本では出来ないような体験ばかりで、多少の不便があろうと苦にはならなかった。しかし、両親がとても苦労したことがある。それは「飲用水の確保」である。タイにも、日本と同様に浄水場はあった。課外授業でバーンケーン浄水場に行った私は、そこで川の茶色の汚水をきれいにするための、ろ過や消毒といった様々な作業を見た。そしてそのために多くの職員が毎日苦労をして働いているということも知った。それでも、その水が安全だとは決して言い切れないのが現実で、私達在タイ日本人は毎週、あるいは毎月飲用水のペットボトルを何本も買っていた。

そんな私も日本に帰国し、今では水道から流れる水を安心して飲むことができる。その上、その水道水で母は毎日ご飯を炊き、味噌汁を作ることができている。そして、それが時を経るにつれて日常的なことと化していた。

そこで他の世界の国々の水事情について考えてみることにした。

ネパールという国がある。場所によるが、ある村では子供たちが水場までの遠い道のりを重い水瓶を持ち運ぶことが、ほぼ日課になっているそうだ。しかし、ネパールだけではない。世界には、もっと水の確保に悩んでいる国や村があり、たとえ確保できても私達日本人には到底考えられないくらい濁った水を飲んでいるというのが現状だ。そしてこの現状は子供たちが下痢を起こす事につながり、いずれ感染症などの大きな病気を人民にもたらしてしまう。そして今この瞬間も汚水を飲んだことが原因で亡くなっている人がいるのだ。食生活が悪ければ寿命が短くなることは言うまでもない。しかし、このような現状を変えようと必死に働く人もいる。その団体の一つにユニセフが挙げられる。ユニセフは、多くの子供達が清潔な水を飲むことができるよう井戸を作るなどして今も多くの命を救っている。そして昨今、世界ではこのような団体や人はどんどん増えてきている。

では、私達には何か出来ることがあるだろうか。それは世界の国々に目を向け、それぞれの水事情を知り、水の使い方について改めて考えることだと私は思う。きれいな水に囲まれる生活を、いつの間にか当然のように思ってしまっている私達が、今自分が生きる社会ばかりを見つめていたら、その幸せな環境は当たり前、ということで片付けられてしまう。よって日本を含む世界全体に興味を持つことこそ、水を大切に使うことにつながるのではないだろうか。

一年中暑かったタイでは、旧正月になると毎年伝統的な行事として「水かけ祭り」があった。知らない人や車にも平気で水をかける。いつもは不機嫌な運転手でさえ水をかけられた時、満面な笑みをこぼしていたことに私はとても驚き、かつ嬉しくなった。今も水は人々の笑顔を作っている。

入選

かけがえのない「一滴の水」

東京都　八王子市立宮上中学校
三年　鍛治　美佑

「蛇口をひねっても一滴の水も出てこない。出てくるのは涙とため息だけだった。」

母はあの阪神淡路大震災当時を振り返ってそう言った。六千人を超える犠牲者を出した大地震。昨日まで「当たり前」だと思っていたことが実はどんなに「ありがたい」ことだったか。神戸で被災した両親は、空っぽの青いポリタンクに給水車から注がれるきれいな水を見た時に、心の底からそう思ったという。私が生まれる前の話だ。

あれから十六年。あの震災をこえる大災害が、東北地方を襲った。東日本大震災。国内最大級の地震は、大きな津波とともに人々の生活を一瞬に飲み込んでしまった。

「今、一番必要なものは何ですか?」テレビでは連日被災地の様子が放送された。大切な家族を失い、家を流された人々の顔はどの顔も疲れきっている。「水です。」多くの人々が「水」と答えていた。

ある被災者は洗面器にためたわずかな水で顔を洗い、その同じ水で口もゆすいでいる。「一滴の水も無駄にできない。」と真剣な顔で話していた。その映像のひとつひとつが両親の姿と重なり、私に「水」について深く考えさせるきっかけとなった。

東京は今回の震災による直接的な影響は少なかった。蛇口をひねればいつものきれいな水を必要なだけ使うことができた。

ところが被災地から遠く離れたこの場所で信じられないことが起こっていた。買い物かごいっぱいに飲料水を買う人達。家に帰れば普段どおりに水を使える人達が水を買い占めていたのだ。被災地の人達の生活を思うと胸が痛かったが、もし水が使えなくなってしまったらという強い不安感が人々をこういった行動に走らせるのだと思った。

「水が出ない事でトイレが一番困る。」と話していた被災者も大勢いた。水がなければ私達の生活はすぐに回らなくなってしまう。それどころか命そのものも危険にさらされる可能性もあるのだ。

以前、水道もなく井戸もないアフリカの小さな村で子供達が朝早くから川に水をくみにいく様子をテレビで見た。泥水のような水を大事そうに抱えて長い道のりを自分の村まで帰っていく。そしてその水で料理を作り、お茶を飲んでいた。どうしてあんな濁った水が飲めるのだろう。まだこんな国もあるのかと驚かされたことを覚えている。

しかし水について学習する中でもっと衝撃を受けたことは、実は世界には安全な水を確保できない人が十二億人もいて一日六千人もの子供達がそのために亡くなっているという事実だ。また地球温暖化や人口の増加、産業の発展や生活廃水にともなう水質汚染などで世界中のいたるところで深刻な水不足が発生していることも知った。

水に恵まれた日本に生まれ、当たり前のようにきれいな水を飲んで育った自分が、こんなに大切な「生命の水」に対してあまりにも鈍感だったことに初めて気づかされた。

母はお米のとぎ汁は鉢植えに。お風呂の残り湯は洗濯や掃除に。お皿は汚れをふき取ってから洗う。そうすることで水も洗剤の量も減らすことができ、海や川を汚さないですむのだという。特別なことではない小さな積み重ねが、本当は一番大切なのかもしれない。私も今後は洗顔や洗髪、シャワーの際にもこまめに水を止め大切に使っていきたいと思う。

『一滴の水』。地球上の水を風呂桶一杯分と仮定して私達が使える水の量だ。そのわずかな水を地球上のすべての生き物が分かち合って暮らしているのだ。

かけがえのない『一滴の水』。その水が決して絶えることのないように。豊かな水であるように。私達はその重さを知り、感謝しながら、今、自分達が出来ることを着実にやっていかなければならないと思う。

入選

宇宙で見つけた不思議なボトル

神奈川県　座間市立西中学校
二年　小泉　茉莉亜

私は今、不思議なペットボトルを持っている。

このペットボトルを見つけたのは昨年の秋の事だった。

この年、山崎直子宇宙飛行士が国際宇宙ステーションへ向けて飛び立った。野口聡一宇宙飛行士が宇宙長期滞在の任務を終えて地球へ帰還した。小惑星探査機はやぶさが数々の苦難を乗り越え無事に地球に辿り着いた。

様々な宇宙に関するニュースがテレビや新聞などで盛んに報じられていた。

天体観測の好きな父の影響もあって宇宙に興味のあった私は、宇宙飛行士模擬訓練に応募し、参加できる事になった。

この体験は、実際に宇宙飛行士が訓練に使用した閉鎖環境施設に泊り、数々のミッションを行なうというもので、この施設の中に入ると、すべてのドアが閉鎖され、外界と遮断される。連絡手段は通信機のみとなり、与えられた物資で、すべてを賄わなければならない。

私を含め、集まったメンバーは、最初に体験プログラムと五百ミリリットルの水の入ったペットボトルを二本渡された。

地上から四百キロ上空を飛行する国際宇宙ステーションでは、トイレで回収された尿を蒸留して、水に変え、船内の空気を除湿した水や、その他実験に使用した水と一緒にろ過し、浄化して飲料水として再利用している。宇宙では水は大変貴重なものだ。

「皆さん、今渡した水は今回のミッション終了までの物資です。自主管理の上ミッションを遂行してください。」

とスタッフから説明があった。

期待と不安で頭が一杯だった私に、更なる試練が加わった。

手元にある二本の水、当然一日一本しか使えない。水のいらないシャンプーやアルコール除菌シートで体を拭くなど、極力水の使用を抑えた配分をしてみた。

それでも、食事や水分補給はもちろん、歯磨き、洗顔にも使用するため水の減りは想像以上に早く、あっという間に一本がなくなってしまった。

普段、水なんて、蛇口をひねればいつでも口にできると思っていた私は、この事態に唖然とした。

最後のペットボトルは一本目より、更なる節水を迫られる事になった。閉鎖環境施設には時計がないため、時間配分ができない。飲む回数を制限するか、一回の量を調整する以外方法が見つからず悩んでいた時、ペットボトルに刻まれていく目盛りを見つけた。これは、自分にしか見えない心の目盛りだ。

この不思議なペットボトルのお陰で、二日間のミッションは無事に終了した。貴重な水もわずかだが残す事ができ、地球に帰還した時の最後のひと口の水の味は今でも覚えている。

無限に広がる宇宙空間では、地球も一つの閉鎖環境ではないだろうか。水が足りないからと言って他の星から運んで来ることはできないのだから。

日本は水の豊かな国と言われている。しかし、そんな日本でも度々水不足は発生する。世界的にも水資源に恵まれた国は極わずかだ。

今私は、心の中にペットボトルを持つようになった。水を使うたび、目盛りが刻まれる不思議なペットボトルは、私に水の大切さを教えてくれる。一人ひとりが心の中に、この不思議なペットボトルを持てれば、いつの日か地球上から水不足をなくすことも夢ではないと思うのです。

入選

水のある風景

神奈川県　聖園女学院中学校
一年　籾山　麻衣

萌葱色の稲が、波のように押し寄せてくる。水面は、いくつもの星くずが散りばめられ、青く染まった空を映していた。車窓から眺める田園風景は、思わず息をのむほどの美しさだった。私は、そっと心のシャッターを切る。自然の描いた景色を心に残しておきたかったからだ。

私の身近なところにも、水のある風景を目にすることができる。それは、横浜市瀬谷区を流れる相沢川だ。この川に初めて訪れた時はいつだっただろうか。私は、何回か足を運んだことがある。木々の間から、やわらかな光が降り注ぐ春の日。小鳥のさえずりと、川のせせらぎが調和して、心地良く耳に届く中、相沢川ウォークを楽しむ人々。相沢川は安らぎの場として、地域の方々に親しまれている。しかし、私はこの川について何ひとつ知らなかった。

そんな私が、水と向き合っていこうとしたきっかけは、去年の総合学習の時だった。相沢川の清掃や、川にいる生き物などの調査を行った。この取り組みを実行するために「相沢川を考える会」の方の協力を得ながら、学習を進めていった。

まず第一に、実際に足を運び、川を掃除した。缶、ダンボール、おかしの袋、ペットボトルなどたくさんのごみが捨てられていた。私は、「相沢川を考える会」の方々が、この川を守るために、定期的に掃除している一方で、安易にごみを捨てる人がいるという現状が、皮肉で切なくなった。

その次に、相沢川にいる生き物を調べることにより、よごれ具合を推測することができた。コサギ、カワセミ、ゴイサギ、カルガモなどの鳥類をはじめ、オイカワ、モツゴ、アブラハヤなどの魚が生息している。つまり、相沢川は比較的きれいな川だということが分かった。

その相沢川を守るために、まず相沢川について関心を持ってもらいたい、そして次の世代に引き継いでもらいたい、これらの願いから、グループごとに分かれて、看板、ポスター、パンフレットの制作、近くの幼稚園児や保護者とのウォークラリーを計画した。しかし、東日本大震災後、余震が続くために、ウォークラリーは中止になったが、ここまでの過程の資料を次の六年生に手渡すことができた。

実際に体験して得たことは、川に対する思いを非常に強くしたように思われる。一人ひとりが、身近な川や水、自然について考えていくようにすれば、さらに広い範囲で水源を考えていくことにつながるのではないだろうか。

新聞で、神奈川県は近代水道発祥の地で県内で水のほとんどを自給する体制が整っていることを知った。様々な人々の協力で水源管理が行われているらしい。しかしながら、土砂流入があったり、この間の震災で導水管に影響がでたりと心配はかくせない現状である。

特に、今回の震災で人々の意識に少しずつ変化があったのではないだろうか。人間ではどうすることもできない自然の怖さと自然の恵みへの感謝の気持ちを改めて感じたことと思う。私達一人ひとりができることは、大海の一滴にも満たない。だが、共に力を合わせることで、次世代を担う私達に課せられた使命を果たすことができるのではないだろうか。私はこれからもかけがえのない自然を守っていきたい、いや、守っていかなければならない。

入選

僕と水との関わり

富山県　高岡市立高陵中学校
二年　参納　幸志郎

「あぁー、のどが渇いた。」
部活中の僕は水道の蛇口をひねり、口いっぱいに水を含み、ゴクゴクと音をたてて飲んだ。こういう時はとても水がおいしく感じられ、生き生きとした気持ちになる。やはり、部活動のときの水分は欠かせない。
僕にとっての水は、何といっても飲み水だ。今までは、水のことで不便を感じたことはなくて、特に意識せずに水を飲んでいたけど、水について考えさせられる出来事があった。
それは、横浜のおじさんから聞いた話だ。おじさんの住んでいるマンションの水のポンプが東日本大震災で壊れてしまい、水道が使えなくなったこと。飲み水をコンビニに買いに行ったけれど、自分の水を確保しようと買いだめした人が多く、なかなか手に入らなかったこと。大変な思いをしたそうだ。
どうしてみんな真っ先に水を求めたのだろう。僕は水のことをもっと知りたくて、家族に「水と人との関わり」について聞いてみることにした。
まず、母に聞いてみた。母は、八尾の山奥の実家から名水の湧き水をペットボトルにたくさんくんできて使っている。母は、
「家事をする時は、水とは切り離せない事ばかりだよ。食事や飲み物には安心でおいしい水を使えるように、洗濯などの時は水を無駄にしないように、と考えていつも過ごしているよ。」
と言っている。
次に、父に聞いてみた。すると父は、
「この家の電気は三分の一近くが水の力でできているんだよ。」
と言った。水の力というのは水力発電のこと、つまり、電灯が三つあったら、一つは水の力で光っているということだ。調べてみると、水力発電所は北陸に百十五か所もあった。
それから、図書館で働いていたことのある祖父に聞くと、ことわざを教えてくれた。
「〝我田引水〟という言葉を知っているかな。水は田畑で稲や野菜を育てるのに欠かせないので、昔から自分の田へだけ水を引き込むために争いが多かったのだよ。自分の利益だけ考えるのは悪いという意味で〝我田引水〟という言葉が生き続けている。これは、やはり水の大切さが人間の生き方を示すことわざになっているのだと思うよ。」
この話を聞き、他にも水の付くことわざがあるのではと思い、ことわざ辞典で調べてみた。調べてみると三十ほどあり、三つに分類することができた。一つ目は水の性質を利用したもので、「焼石に水」や「水に絵を描く」などがあった。二つ目は、水は身近だから例えに使われているもので、「寝耳に水」などがあった。三つ目は、水を大切にとらえたり敬ったりする気持ちがことわざになったもので、「我田引水」や「親の恩と水の恩は送られぬ」などがあった。三つの分類のうち、水の性質を例えに使ったものが意外に多かった。これは、水が身近なものであった証拠だと思う。ことわざは古くからあるものなので、人と水は昔から深い関わりがあったということがよく分かった。
横浜のおじさんの出来事から、人と水との関わりについて家族に聞いて考えてみたが、水は昔から生活に密着しているだけでなく、現代では発電にまで利用され、生きていくために欠かせないものとなっていることがわかった。また、大震災で人々がペットボトルの水を買いに走ったのは、まさに「我田引水」的だけど、背景には、水がないと生きていけない、という人の思いがあった。そのことが今は理解できるようになり、僕と水との距離がすごく近くなった。
これまで、何げなく水を飲んでいたが、これからは水への感謝を忘れずに「いただこう」と思う。